富田林の自然

人と生きものがひびきあう
里山をめざして

No.5
2007年3月

富田林の自然を守る市民運動協議会

目　　次

鳥の羽が物語るもの
寺 川 裕 子 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

里山に集う ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

景観生態学から見た里山（森林の生態学）
佐 藤 治 雄 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

宇奈田川の昨今
辻　　安 敏 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

奥の谷モデル地区における里山保全施策の検討 ・・・・・・・・・・・・・・１４
平成 18 年度「自然環境保全活用調査その 5」報告書より抜粋

協議会参加団体の活動紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
（NPO 法人里山倶楽部、「石川あすかプラン」を考える市民連絡会、竜泉里山クラブ、
富田林の自然を守る会、富田林勤労者山岳会「嶽の会」、NICE）

平成 18 年度　協議会事業報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

表紙の写真

自然環境市民大学で発表する人たち

大阪自然環境保全協会の自然環境市民大学は、2004 年（第 2 期生）からその講座の一部を奥の谷をフィールドとして実施している。2006 年度は〈雑木林の下草刈り〉、〈樹木の名札付け〉、〈水の生きもの池の垣根造り〉が行われた。写真は下草刈りの班が現地で行った発表会の様子である。

鳥の羽根が物語るもの

富田林の自然を守る市民運動協議会
理事　寺川裕子

この2年ほど前から鳥の羽根をコレクションしています。といっても、最も古いものは1985年採集なので、20年以上前から集めはじめていたことになります。当初は何の羽根か調べる手立てがありませんでしたが、最近は鳥の羽根図鑑やインターネットで調べることができるようになり、40種類ほどある羽根の持ち主がしだいにわかってきました。

双眼鏡で見るバードウォッチングではなかなか見えませんが、鳥の羽根は本当に美しいものです。カモ類の青緑に光る風切羽根、白サギのレースのような飾り羽根、ビロードの手触りをもつフクロウの羽根、白黒の素敵な水玉模様はアカゲラ、青いウロコ模様はカケス・・・と手にとるたびに自然の造形の素晴らしさに感動をおぼえます。

また羽根が落ちていたということは、周辺にその鳥がいた、という明らかな証拠になり、たとえ拾ったときに種類がわからなくても後日に調べてみてびっくりすることもあります。富田林の嶽山で1987年に採集した小さな羽根は、後にトラツグミとわかりました。石川の河川敷でまとめて拾った横縞模様の羽根は、野鳥に詳しい人からは水辺に多いタシギではないか、と言われましたが、ヤマシギでした。これらはいずれも、絶滅が心配される種として大阪府のレッドデータブックに掲載されています。

まとまって落ちている羽根は、肉食の獣や鳥に捕食された跡だと思われますが、そこに思わぬ自然のドラマを垣間見ることもあります。やはり石川で大量に採集したカルガモの羽根は、軸のほとんどがかじられて折れており、そこから、おそらくタカなどの猛禽類ではなく、イタチ、テン、野犬などの哺乳類に襲われたのではないかと考えられます。昨年、生駒山麓でみつけたイカルの羽根は、1本だけにかじり跡があり、そばにフクロウの羽根が落ちていましたから、フクロウに捕食されたあとを獣類がとおりかかって羽根をかじったのでは？と、思わずその光景を想像しました。

鳥の羽根は、里山や河川だけでなく、町中の公園や道ばたでもけっこう拾うことができます。地味で目立たないものでも、意外な鳥がそこにいたのかもしれません。なぜ、そこにその羽根が落ちていたのか、いろいろ考えをめぐらすと、普段は気づかない環境の変化や自然の物語を感じとることもできるでしょう。明日、散歩の途中で鳥の羽根をみつけたら、ぜひ手にとってじっくりながめてみてください。

←　カルガモの風切羽根（2006/12/22　石川）

里山に集う

富田林の自然を守る会が奥の谷で里山保全活動を始めてからかれこれ10年になる。2002年に「富田林の自然を守る市民運動協議会」が設立されてからは里山保全に関わるいろいろな行事が取り組まれ、奥の谷に集う人たちが飛躍的に増えてきた。1999年から行われているNICEによる国際ワークキャンプも大きな役割を果たしている。

2006年度に取り組まれた奥の谷での活動の一端を写真で紹介する。

富田林「里山ホリデー」

下樵り作業（照葉樹林へと遷移が始まり、ヒサカキなどが鬱蒼と繁る雑木林の小低木を取り除き林床を明るくする）

間伐したヒノキ材を皮むきして集積場に運ぶ

枝打ち作業（間伐が終わったヒノキ林で全長3mの柄のついた枝打ち用ノコギリで枝打ちをする）

里山保全作業は、富田林「里山ホリデー」と称して概ね月１回行われている。主な作業は、雑木林の下樵り、スギ・ヒノキ林（人工林）の間伐および枝打ち、雑木林やスギ・ヒノキ林に侵入する竹の伐採、ため池の土手や休耕田の草刈りなどである。

自然観察会（植物）

昆虫ウオッチング

自然観察会

協議会が取り組む主な行事の一つに自然観察会がある。植物を中心とした観察会は、4月、5月、6月、9月、10月に、昆虫ウオッチングは7月に行われた。植物観察は奥の谷周辺を散策しながら、田圃の畦、雑木林や人工林の林床などに咲く草花を観察し記録する。昆虫ウオッチングは昼間はネットによる採集、夜はライトトラップを仕掛ける。また、午後8時頃、暗闇の山中を、昼間仕掛けたバナナトラップやコナラなどにいる昆虫を探して歩く。子どもたちに人気の行事の一つだ。

国際ワークキャンプ

1999年から毎年夏に取り組まれている国際ワークキャンプは8回目を迎えた。2006年はスロバキア、韓国、イタリア、フランス、中国、日本から若者10人が奥の谷のみかん小屋に7日間宿泊、スギ・ヒノキ林の間伐、雑木林の下草刈りなど里山保全の活動を行った。

この国際ワークキャンプはNICE（日本国際ワークキャンプセンター）と太子町葉室里山クラブおよび富田林の自然を守る会が共催して、太子町山田の山林と奥の谷で行われている。

ヒノキ林の間伐作業でのブレイクタイム

昼食（韓国人は自国の料理に腕を揮う）

自然環境市民大学
大阪自然環境保全協会

水の生きもの池の垣根造り実習

大阪自然環境保全協会による「自然環境市民大学」の講座の一部が奥の谷をフィールドに行われている。2006 年度（第４期生）のテーマは１班＝「もりだくさん」（雑木林の植生調査と下草刈り）、２班＝「奥の谷の自然に親しむ」（樹木に名札を取りつけよう、樹木の名前を覚えよう）、３班＝「竹林の里山への侵入防止と竹の活用」（竹の伐採と垣根造り）。約 100㎡ の雑木林の植生調査と下草刈り、31 種類の樹木の名札掛けと周遊コースの樹木マップ、「水の生きもの池」の周囲への立派な垣根ができるなど、それぞれ大きな成果を奥の谷に残した。

名札掛けとパンフ

発表会

野草を食べる会

野草を摘む

毎年大人気の野草を食べる会

天麩羅にすると何でもうまい

ヨメナごはん、ヨモギだんご、トトキのあえもの、ノビルのぬたなどなど、食べられる野草は多い。野草を食べる会の人気は抜群である。

里山コンサート

トゥーマヌーヴの愉快な歌

静かな奥の谷に、楽器の音と歌声が響く。NICE と地元の合同コンサート。夜は河内音頭で楽しく踊る。

あすなろバンドの素敵な演奏

夜は河内音頭で

水の生き物と遊ぶ

水の生きものと遊ぶ保育園児たち

休耕田で虫探し

果樹の丘で

休耕田に水を溜めた水の生きもの池。「生きもの水辺づくり」の行事では、子どもたちは生きもと遊び、大人は池の整備を行う。

保育園から遠足にやってくることもある。子どもたちはどろんこになって、オタマジャクシやメダカとりに夢中だ。水遊びに飽きると休耕田や果樹の丘で虫取りなどに興じる。

どんどともちつき

いきよいよく燃え上がるどんど

よいしょ

書初め

まるめる

どんどは、門松、しめ縄などを焼く新年の行事。最近はあまり行われなくなった。里山保全活動の事始めとして３年前から奥の谷で始めた。書き初め、もちつきも同時に行う。

つる細工

講師の指導で篭を編む

こんなにいい篭ができたよ

管理が放棄された里山林には、フジ、アケビ、アオツヅラフジなどの蔓植物が多い。みんなで山に入り蔓を採集、篭やリースをつくる。人気の行事の一つだ。

奥の谷での生活

昼食風景

薪ストーブで冬も快適

囲炉裏を囲んで

富田林「里山ホリデー」などの行事のおりには、冬はたき火を囲んで豚汁などを作って昼食をとる。また、NICE の週末ワークキャンプでは、囲炉裏を囲んでの鍋料理が最高だ。薪ストーブが入って快適なキャンプ生活となった。

景観生態学から見た里山（森林の生態学）

佐藤治雄（大阪自然環境保全協会）

１．はじめに

数年前に、田淵武夫さんから富田林の自然を守る市民運動協議会主催の「里山管理ボランティア養成講座」で森林の生態学についてなにか話をしてほしいと依頼を受け、１時間ばかり講演したことがあった。今回、そのときの講演の内容を「富田林の自然」に寄稿してほしいと依頼を受け、当時どんなことを話したか必ずしも正確には記憶していないが、当時の資料をたよりにすこしまとめてみようと思う。最初の依頼は「森林の生態学」と言うことで、それ自体、話すべきことは多々あるが、「里山管理」という講座の主旨から考え、純粋な生物学的な森林の話よりも、人との関わりとの関係で森林を見たらどうなるかという方向に収斂して行ければと思って話を組み立てた。しかし、あまりまとまった話しにならなかったことをお詫びしたい。

２．自然

森林に限らず、地球上のすべての植生（植物の生えている場所、状態、植物そのものを漠然と言う）は、本質的に時間とともに変化していく。私は、「自然」の問題を考えるとき、この「時間」という要因を頭に置いておくことは非常に大切なことだと思っている。

「自然とは何か」という命題に対しては様々な言い方があろうが、私は広辞苑に示されているいくつかの定義のうち、「・・・人力によって変更・形成・規整されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいでた状態」というのが一番気に入っている。なぜなら、自然というものの本質は、まず、人間がなにも関与しないこと、そして、時間とともに勝手に変化していくものという、私のもっている「自然」というイメージが非常にうまく表現されているからだ。

３．サクセッション

人間が関わることなく、おのずから成る生成展開によって成りいでる、というのは、生態学で言う「生態遷移（サクセッション）」、なかでも一次遷移（primary succession）とよばれる現象にいちばんよく表れていると思う。

一次遷移というのは、教科書的に言えば、たとえば火山の噴火による溶岩の流出や火山灰の堆積、あるいは大規模な崖崩れや洪水などによって、まったく植生のない裸地（自然裸地）が出現したとき、その場所が時間とともに徐々に変化していき、いずれはその土地の気候条件よってきまる一定の植生タイプに行き着く現象をいう。

溶岩や火山灰など、有機質や肥料分の全くない場所にどうして植物が生えるようになるのか。いちばん最初は、空気中にほこりと一緒に漂っている緑藻や藍藻の胞子が降水とともに地上に落ち、地面がしめっているわずかな期間に光を受けて繁殖し、ごく薄い有機物の層をつくる。特に、藍藻の仲間は空気中の窒素を固定することができるので、時間がたつにつれて地表の有機物やミネラルの量も増えていく。そうすると、今まで、仮に草本の

種子などが風で運ばれてきても、水分や有機物がほとんど無いために生育出来なかった場

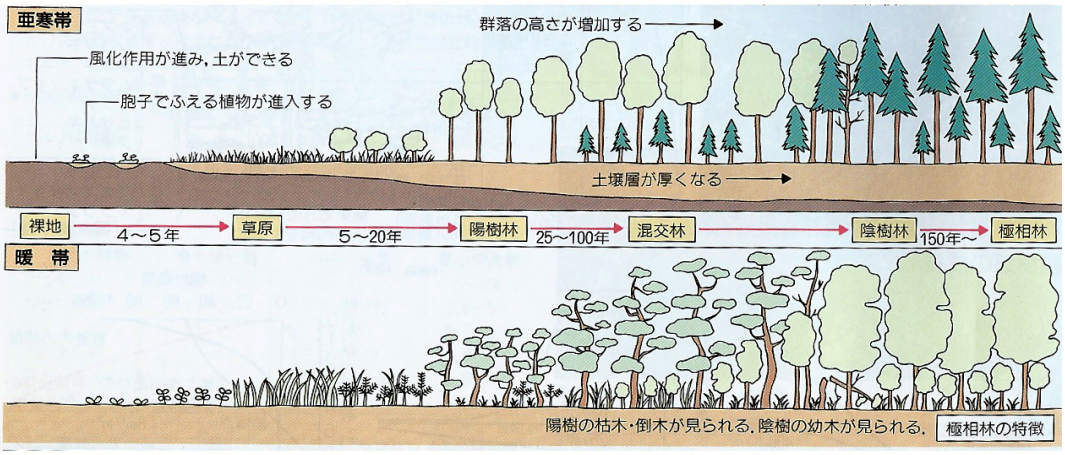


図１．植生遷移の模式図（浜島書店：増補最新図表生物）

所でも、小さな高等植物なら生育が可能な条件ができていく。そして、こういう植物が生えては枯れ、生えては枯れして行くうちに、地表や地中に蓄積される有機物の量は飛躍的に増大し、さらに大型の植物が生育できる環境に変わっていく。

図１に示した植生遷移の模式図は高校生物の参考書から引用したが、左から右へ時間が進むにつれて裸地から草原へ、草原から陽樹林へ、陽樹林から極相林へと、同じ場所の植生が次々変化していく様子が描かれている。とくに注意してもらいたいのは、サクセッションというと単に地上部の植生の変化だけが注目されがちであるが、実は、土の中での変化も大きく、有機物を含んだ「土壌層」の厚さが時間とともに大きくなっていくことと、この図には全く示されていないが、そこに生息する動物相も時間とともに変化していることである。

生態学では、生き物の生存・存在は環境の支配を受けるが、生き物の存在自体が環境に影響を及ぼす考え、この現象を「作用－反作用」とか「環境と生き物の相互作用」というような言い方をする。ここにしめした生態遷移（植生の変化、土壌の変化、動物相の変化）という現象は、まさに環境と生き物のあいだの作用－反作用、相互作用の典型的な例ではないかと私は思っている。

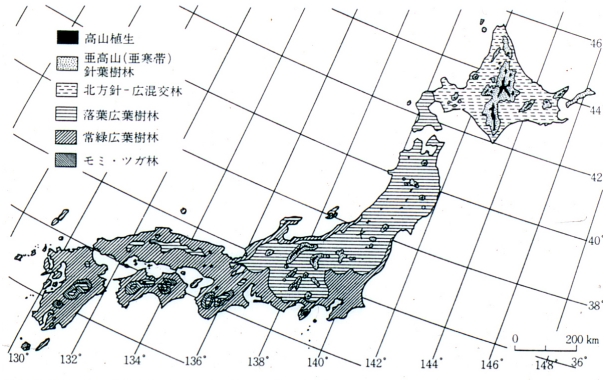


図２．日本の森林植生の分布（吉岡 1973）

もうひとつ、この「裸地から森林へ」という変化は、一見、遅々として進まない緩慢な変化に見えるけれど、じつは非常に強い力で進んでおり、これを押し止めるためには非常なエネルギーを必要とすることである。わたしは、この「裸地から森林へ」という変化は、ちょうど、水が高いところから低いところへ流れ落ちるようなもので、この変化を押しとどめるには継続的な大きな力が必要だと実感しながら見ている。

日本のように気温も高く、雨量の多い地方では、サクセッションの行き着く先、最終的

な植生は森林になり、「極相林」と呼ばれている。そして、その森林タイプは日本では主に気温の条件に依存し、気温の高い地方では照葉樹林ともよばれる常緑広葉樹林になったり、気温の低い地方ではブナやミズナラが多い落葉広葉樹林になったりする。前ページに示した植生地図は、このような、本来、人間が関わらずに自然遷移に任せたとき成立するであろうと思われる森林生態系の分布図の一例である（この種の植生地図は、筆者によって異なり、細部では必ずしも一致しない）。

４．森林の構造

自然遷移によって成立した極相林は、ふつう、いくつかの階層構造が見られる。これも非常に教科書的な言い方だが、まず、森林の最高層に達する樹木群から成り立つ「高木層」、更に、その下に「亜高木層」、さらにその下に低木層、亜低木層、草本層、更に地表に近いところにコケ層がある。

この高木層から草本層、コケ層へという垂直的な構造を支配している最も大きな要因は、いうまでもなく光の強さである。高木層は強い直射光を受け、たくさんの光合成ができるが、亜高木層は高木層で使われなかった光を利用することになるから必然的に光合成量も少なくなり、更にその下の低木層、草本層へと行くに従い、それより上層にある植物によって利用されなかった、いわば使い残りの光エネルギーしか利用できないから、そういう環境でも生育可能な植物しか生きていくことができなくなっている。光以外の環境要因、たとえば湿度とか、風の強さなども高木層から低木層、草本層へかけて大きく違い、そのことがそういう環境で生育可能な動植物を規整していることはいうまでもない。

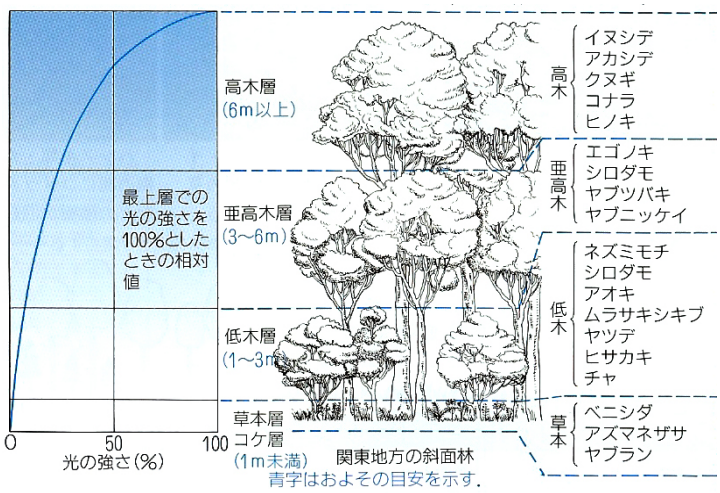


図３．森林の階層構造模式図（浜島書店：増補最新図表生物）

５．生き物の生きていける条件

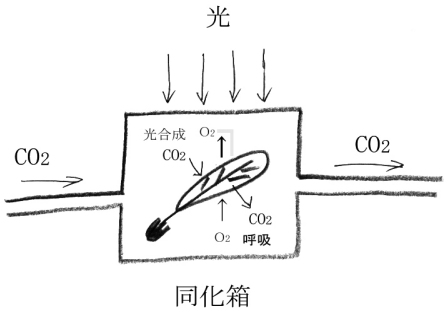
上に述べたような一次遷移にともなう生き物の入れ替わりや、森林の発達のともなう樹種構成の変化、あるいは階層構造の成立がどのようにして起こるかについては、生き物がどのような原理に基づいて生育し、死んでいくか、その原則的な側面を理解していることが必要である。つまり、生き物の生育と環境条件関係の基本的なパターンの理解が必要であろう。

生き物の成育あるいは活動の量と環境要因の量とのあいだの基本的なパターンは３つある。一つは、環境条件の増加にともなって生き物の成育が促進される場合である。このタイプの現象として分かりやすい例として、植物の葉が行う光－光合成曲線を例に挙げてみよう。

植物の光合成は、植物の葉に空気中の CO_2 が取り込まれて有機物（ブドウ糖）を合成し、葉の外へ O_2 を放出作用で、よく知られているように

$$6CO_2 + 6H_2O \rightarrow C_6H_{12}O_6 + 6O_2$$

という化学式で表される。



同化箱

同化箱の模式図

光合成を測定するには植物の葉を同化箱と呼ばれる容器に閉じこめてある強さの光を照射し、そのときに同化箱に入る空気中の CO_2 濃度と同化箱から出る空気中の CO_2 濃度を比較して、どれだけ CO_2 が吸収されたかで測定する。生きた植物は光合成と同時に呼吸（O_2 を吸収し CO_2 を出す）も行っているから、この方法で測定される光合成は植物が実際に行った光合成（真の光合成）による CO_2 吸収量から植物が行った呼吸により放出される CO_2 量との差で、「純光合成」とか「見かけの光合成」と呼ばれている。

図４はハマビワの光合成を測定した例で、横軸には光の強さが、縦軸には（みかけの）光合成量が単位葉面積をあたり・単位時間あたりに吸収される CO_2 の量で取ってある。図の左端、光の強さがゼロのところは暗黒条件を表すが、光のないところでは植物は光合成ができないので、葉が行っている呼吸により放出される CO_2 がマイナスの吸収量として測定されている。

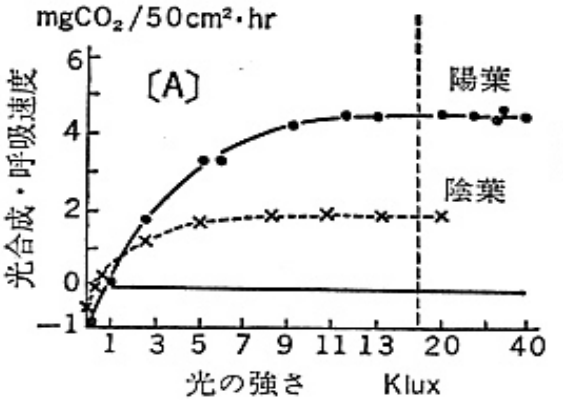


図４．光－光合成曲線の一例（ハマビワ（依田「森林の生態学）より

この関係を非常に単純化して模式的に示したのが図５であるが、この図で、いくつか留意すべきポイントがある。ひとつは暗黒条件で測定されるマイナスの CO_2 吸収量、すなわち葉が暗黒条件で行っている呼吸量（暗呼吸量）である。

この値（暗呼吸量）は図５に示されるように、日のよく当たるところについている陽葉で大きく、日陰についている陰葉で小さい（この違いは主に葉の厚さの違いによる）。

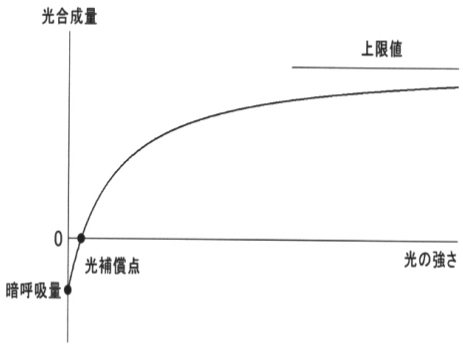


図５．光－光合成曲線の模式図

暗黒条件からだんだん光の強さが増加するにしたがって光合成量は直線的に（光の強さに比例して）増加していき、やがて「ある明るさのところ」で見かけの光合成量がゼロになる。この明るさの所では、光合成によって吸収される CO_2 と呼吸によって放出される CO_2 の値が等しくなっており、この明るさのことをとくに「光補償点」と名付けている。これより光の強さが大きくなっていくと純光合成量も増加していくが、その増え方はだん

だんにぶくなっていき、ある上限値に漸近していく。つまり、ある程度光の強さが大きくなれば、光合成は光の強さに関係なくほぼ一定の値になる。

今、光合成によって作られる有機物の量を収入、呼吸によって消費される有機物の量を支出とすれば、光補償点より強い光が当たれる条件の所では「収入＞支出」となっており、光償点の所では「収入＝支出」すなわち、収支とんとん、光補償点より暗い条件の所では「収入＜支出」となっている。

図４の陰葉と陽葉の比較では、暗呼吸量は陰葉の方が陽葉より小さく、光補償点は陰葉の方が暗いところにある。しかし、強い光に対しては陰葉は早く上限に達し、その上限値も小さい。いいかえれば陽葉は強い光のところで効率よく光合成できるのに対し、陰葉は暗い条件の所でもプラスの光合成が出来るようになっている。

この例は１枚の葉っぱにおける収入と支出の関係を表しているが、この関係は、たとえば一本の木や草の収支にほとんどそのまま置き換えることが出来る。ただ、収入に関わるのは光合成器官である葉だけであるのに対し、支出にかかわるのは葉だけでなく、根や茎（幹）、枝など植物体全体が関わっていることである。したがって、一本の木にとっての光補償点は単葉にとっての光補償点よりもっと明るいところに来ることは言うまでもないが、いずれにせよ、この明るさより暗い時間が長く続けばいずれその木はじり貧になって枯死するから、この明るさはその木にとっての生死を分ける明るさということが出来る。

環境要因の量と生き物の成育との関係の次のパターンは、たとえば毒物などのように環境要因の量の増加に従い、生き物の成育が阻害されるものである。この種の生き物の成育に阻害的に働く環境要因の量と生育量のあいだには、非常にきれいな相関関係があるが、ここでは深入りしないことにする。

環境要因の量と生き物の成育との関係で重要な次のパターンは、たとえば温度のように、ある温度条件のところで生育量や分布密度が最も高く、それよりも温度が高くても、温度が低くても生育が阻害される、というパターンである。図６は中部地方に生育するマツ科モミ属樹木４種の温度条件（ふつうの温度ではなく、生育期間の温度条件を示す温量指数で示してある）に対する分布密度の状況を示しているが、これからも分かるように、よりそれぞれの種が最適な温度条件で最も高い分布密度を示し、それよりも温度条件が高くなっても低くなっても分布密度が低下していき、最終的にはある温度条件の範囲内でしか分布出来ない（温度条件には上限と下限がある）ことがわかる。

環境要因の中にはある条件で生物の成育が最適になり、それよりも要因量が多くなっても少なくなっても生育が抑制されるというものがたくさんなる。たとえば、土壌中の無機塩類量がその一例である。図７では横軸に土壌に施した硫安の量が取ってあり、縦軸には24 日間栽培された大阪白菜の平均個体重が取ってある。ただし、横軸の硫安の量は一定間隔で 10 倍、10 倍となるような対数目盛でとってあるので注

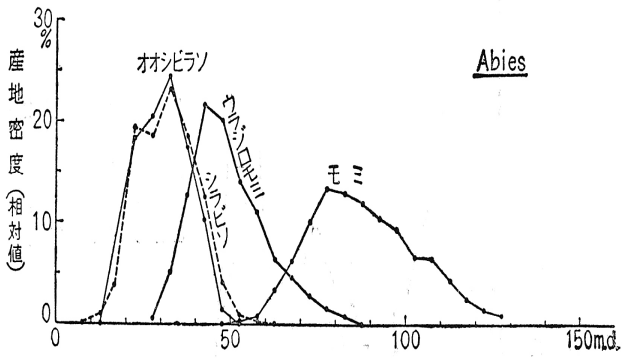


図６．中部地方のモミ属４種の温度分布（吉良）

意が必要である。このような、生物の成育にとってある最適な条件があり、それよりも量が多くなっても少なくなっても生育には抑制的、あるいは阻害的に働くような要因を最適要因とか両生要因と呼んでいる。

ここに示した大阪白菜の例では、要因量(硫安の量）を対数目盛で取ったとき、最適条件を挟んで左右対称の、一見、誤差曲線に似た曲線が得られるが、私が実験したホテイアオイの例では、培養液中の無機塩類量が最適濃度を超えて高くなるにつれて生育阻害の程度は急に大きくなり、対数目盛上での曲線の形は左右対称にならない。

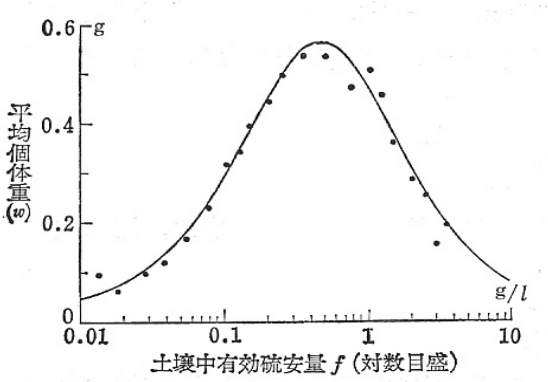


図７．大阪白菜の平均個体重と土壌中の硫安量(対数)との関係．直径18 cm，深さ20 cmのワグナーポットに４本植栽し，1958年10月６日から24日間栽培．くりかえし３回（穂積ら　1960）

このように生き物の生育に対する環境要因の働きには促進的なものや阻害的なもの、あるいはこの両方の性質を持った両生要因として働くものなどいろいろあるが、野外で現実に成育している生き物は非常にたくさんの種類の環境要因に影響されているわけで、いわば「多次元的な環境空間」の中にあると言える。そして、これらたくさんの環境要因のうち、たった一つでも生き物の成育に不適であればその程度に応じて生き物の大きさ（サイズ）は小さくなっていき（あるいは個体数が減少し)、真に不適な条件にあればその生き物は生きていくことができず、死んでしまう。大事なことは、これらの環境要因の中には、単に光とか温度とか土壌水分などのような物理的な要因だけでなく、動物による被食、病害、人為干渉などさまざまなものが含まれることである。

６．人間の関わりと自然のすがた（景観生態学）

先に述べたように、もし人間が全く関与せず、自然の成り行き任せたとしたら、どんな自然裸地も最終的にその場所の気候条件に応じて決まる「極相林」へ向かって遷移（一次遷移）が進んでいくが、現実に我々が目にする森林は雑木林や植林地など極相林とはほど遠いものであり、場合によっては田畑や市街地など、森林にもなっていない場所が非常に多い。

これは、言うまでもなく人間がさまざまな形で自然に関わり、極相林へと向かう自然の力、すなわち遷移を押しとどめてきた結果に他ならない。

自然遷移の中では、たとえば遷移の初期段階で土壌中のミネラル量が少ないなど、環境条件が厳しいときには背の低い草

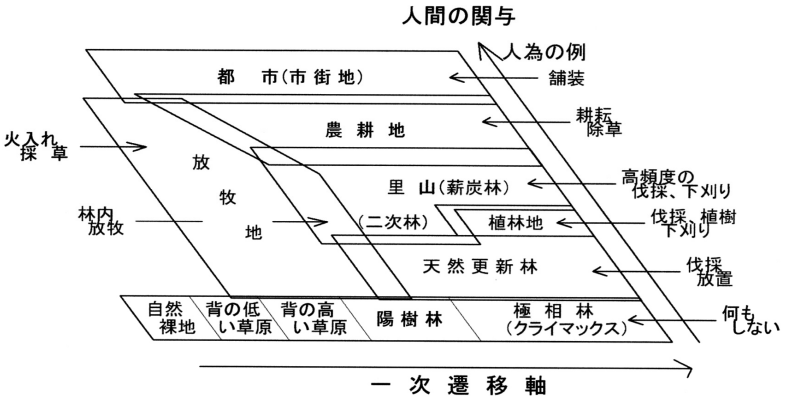


図8. 主な植生、土地利用と人間の関与の強さ(佐藤原図)

原になるなど、環境ストレスの強さと植生の状況には深い関係があるが、人間の自然への関わりも環境ストレスの一つの形と見ると、我々が見る景色も、極相林へ向かおうとする自然の力とそれを阻止しようとする人間の力との押し合いの結果として見ることができる。

右の図は、このよう人間の関わりの形・強さといわゆる自然のタイプとの関係を模式的に表そうとしたもので、図のいちばん下には、人間が何も関与しない、自然裸地から極相林へ向かう一次遷移を取ってある。また、それ以外の様々な植生タイプ、たとえば放牧地とか里山薪炭林とか､植林地に対し､人間がどのような関わりをしているかを示している。

この図で、右下に配置した極相林から離れるに従って（人間の関わりの程度が強くなるに従って）植生の高さが低くなり、一般に生物相も貧困になっていく。たとえば、放牧地では毎年火入れや採草が行われるため森林にはならないし、林内放牧が行われているところでは、樹木がまばらに生え、一見森林に近い景色になっているけれど、林床植生は背の低い草原状になったいわゆる公園景観と呼ばれる特異な植生が成立する。

また、いわゆる里山では、かつて 10 数年ないし 20 数年周期で森林の伐採が行われて炭に焼かれたり薪として切り出され、また林床の草本や小灌木はもっと短い周期で伐られ、落ち葉と一緒に隣接する田畑に肥料として鋤き困れたりするという、かなり高頻度の人間の関わりとバランスの取れた落葉広葉樹林が成立、維持されてきた。

このような、都市とか田畑とか、あるいは里山（薪炭林)、天然更新林（何本かの母樹を残して天然林を伐採したあと、自然の森林再生にまかせる）などを、自然の極相林へ向かう遷移とそれを妨げようとする人間との関わりで自然の章句性の状況を理解しようとする立場はここ 20~30 年ぐらい前から盛んになり、「景観生態学（Landscape Ecology)」とよばれている。

実は、私が学生時代に受けてきた生態学の講義では、まず、人間の影響のない状態における自然のしくみを知ることに重点が置かれ、たとえば実験的にコントロールされた条件における植物成長の原則とか、野外においてはなるべく原生林に近い森林での調査に力点が置かれていた。しかし、この人間の関わりにおいて自然を見るという景観生態学的な視点を取り入れることによって、たとえばいわゆる人間の薪炭林として利用されてきた里山という環境が、そういう環境でしか生育出来ない多くの生き物（動物、植物）を支えてきたことを改めて理解する結果となり、人との関わりが希薄になり、従って植生遷移が進行することに従って里山環境でしか生育出来ない多くの生き物を絶滅の危機に追いやっている現状にもしっかりと目を向けることができるようになった。

その結果、放置された里山に再び人間が関わることによって昔の状態を取り戻そうという､いわゆる市民による里山管理の運動が大阪を出発点に全国に拡がって行ったのである。そして、林床の下刈りをしたり、混み合った木を伐採することなどによって、一度は消滅したかに見えた多くの林床植物が再び姿を現すなど、確かな手応えが得られてきたといえよう。しかし、たとえば、むかしは薪や田畑への鋤き込みなどを目的に林の外へ持ち出された伐採木や下刈りされた木の多くはそのまま林床におかれ、土壌中の有機物を蓄積させているし、何よりも、このような形での森林に対する人間の関わりの規模、程度は過去に比べて小さく、かなり質的な違いを内包していると言えるのではないか。

景観生態学の視点から見た場合、昔の里山景観を本当の意味で取り戻すには、ものすごいエネルギーをかけた努力がいるように思える。

宇奈田川の昨今

宇奈田川保護委員会会長　　辻　　守敏

１ 東板持の歴史

「南河内郡東部教育会編郷土史の研究」にとると、今から１３００前の西暦７００年代に当地区の地名の板持とか、板茂という固有名詞が出てきます。この歴史ある東板持地区は日本史の１ページを飾っていることを大いに誇りに持ちましょう。

２ 環境汚染

昭和４０年代、日本は高度成長時代に入り、生活様式が一遍、大量生産－大量消費になり環境が悪化し始める。全国で公害問題が出始めました。身近な問題として家庭における洗剤・てんぷら油・農薬等下水道への垂れ流し・地元富田林市は養鶏・養豚場の誘致により一機に河川が汚れはじめましたことはご存知の通りです。さわ蟹・ニラ・ホタル・やもめ等が姿を消し始めました。

写真１　清掃前の宇奈田川

下流の大和川がワーストワン汚い１級河川の悪名を得はじめたのもこの時期からです。平成に入ると公害防止法令が整備され、やや回復傾向に向かうが１度汚れた河川は容易に帰ってはきません。

３ 自然への愛情

毎年三月の第一日曜日は石川の大掃除で富田林市民約１万人が清掃に当たっています。当東板持地区は石川の上流の佐備川の一斉清掃に当たっています。平成１８年５月に初めて東板持住民の有志で、佐備川の上流宇奈田川の清掃を行い、２トントラック４杯分のゴミを回収しました。（写真１は清掃前、写真２は清掃中）

清掃の効果はすぐ反映して、何と6月蛍が１匹乱舞する姿を確認しました宇奈田川の清掃はその後、平成１８年９月、平成１９年３月実施し、その後の計画として５月連休明け第一日曜日と、９月第４日曜日に清掃を計画しています。数年後は「蛍の乱舞の名所」になることを大いに期待しています。

４ 自然観察会

平成１８年４月に、東板持町会・寿美ケ丘町会・北寿美ケ丘町会で「自然観察会」を立ち上げ、講師に「富田林の自然を守る市民運動協議会」会長田淵武夫先生、羽曳野市立高鷲南小学校笠原英俊先生をお招きして、自然界における、様々な異変について学習をしました。

例えば林業を営む人が少ないことから真竹が、一年で３ｍずつ繁殖、本来日本にあったタンポポは西洋タンポポに負けて姿を消したとか、当観察会は平成18年3回行いました。平成１９年は竹林の所有者の許しを得て、竹林の間伐、そして、間伐した竹で加工品を作る計画をしています（竹とんぼ・竹馬・花立・かご等）。

写真２　清掃中の宇奈田川

自然観察会は当地域のみならず、富田林市・府下市町村からの参加の門戸を開き自然界の荒廃の確認と自然界をタイムスリップさせる意識並びに忘れていた素朴な加工品の面白さを体験していただくのが目的です。

５ 自然はみんなの財産

ひとり一人が「自然は自宅の庭」「自然は日本の財産」という気持ちを持ち、自然を大切にする輪を波紋ように大きくしましょう。

奥の谷モデル地区における里山保全施策の検討

～H18 年度「自然環境保全活用調査その 5」報告書より抜粋～

１．未調査区域（「南原」南東部）の現地調査

昨年度調査で「（仮）富田林市里山保全地区指定に関する要綱」の対象区域として提案した中の、未調査区域（「南原」南東部）について現地調査を行い、現況の植生や保全すべき自然等について検討した。

（1）現地の概況

未調査区域は、おおむね南原の谷筋の流域範囲として南東部の尾根上までとしている。

当該区域谷筋の入口部分は、平成 16 年～ 17 年に瀧谷不動明王寺の駐車場拡張工事に伴う造成によって、もとの草地、湿地、ため池等の良好な自然環境が失われた。現在は新規農地としてクリの苗木が植栽され、一部にカサスゲ等の湿地を残すのみとなっている。造成対象外の谷奥は、平成 15 年の調査でハンノキとガマの湿地やササユリ生育地などを確認している。

尾根に至る斜面地は、雑木林とスギ・ヒノキ林、および一部に果樹園となっているが、いずれも管理不足によって環境が悪化（竹やツルの侵入、藪化、常緑樹の繁茂や間伐不足による林床の日照不足等）しているところが多い。最南部の尾根上には、スギ・ヒノキ林が倒木して放置された箇所も見られる。

区域内には造成時に整備された谷筋の道のほか、いくつかの踏み分け道があるが、ササ等に覆われて歩行困難である。また、10 年前の大阪国体の際に使われたハイキング道が 1 本通っているが、その後の維持補修はされていないため、危険な崖道となっている。谷の西側も急な崖地となっており、奥の谷側からのアプローチも困難である。

国体時の尾根道では、コナラ、アラカシ、サクラ（ヤマザクラ？）、ヒサカキ、モチツツジ、ヤマフジ、クスノキ、ヤマモモ、モチノキ、ハゼ、ネズミサシ、カゴノキ、ソヨゴ、タラ、ヤブムラサキ、ガマズミなどの樹木が見られた。

（2）現地調査

平成 18 年 9 月 30 日に、対象区域内を富田林の自然を守る市民運動協議会のメンバーとともに踏査し、現況状況を確認した。

２．当該区域の保全施策の提案

現地調査にもとづき、富田林市「緑の基本計画」策定に向けて、「南原」南東部の里山保全施策について以下のように提案する。

（別図「緑の基本計画策定に向けた里山保全施策の提案」参照）

Ⅰ　「（仮称）富田林市里山保全地区指定に関する要綱」の対象区域

約　３７ha　　（一定面積の開発や伐採の届出義務等）

…　2005年度に施策提案を行った奥の谷、および今回調査地の南原の谷地をはさむ両側の尾根の範囲（流域）

Ⅱ　借地契約等による土地の担保

…　南原入口部の農地の一画を担保し、南原での活動拠点とする。里山保全活動や自然の紹介展示等に利用できる施設（里山博物館等）の整備が望まれる。

Ⅲ　覚書や協定締結による保全管理の実施

…　良好な自然環境を維持するために、早急に管理作業が必要な箇所
（入口部南東斜面のササ地、谷奥の湿地、倒木箇所等）

Ⅳ　保護区域の設定（開発禁止、土地の形質変更の禁止、保全管理の実施等）

…　貴重な植物（ササユリ、カサスゲ、ヌマトラノオ、ハンノキ等）の生育地
良好な自然が残るため池と堤（新池：ツリガネニンジン、ショウブ、カワセミ）

Ⅴ　自然再生区域（ビオトープづくり）

…　造成等によって失われた自然環境の再生が望ましい箇所
（造成で改変された2ヶ所の調整池、湿地環境が残る造成地最奥部の畑地等）

Ⅵ　市民農園の整備

…　クリが植栽された造成農地を市民農園として整備し、里山に親しめるレクリエーションの場とする。

Ⅶ　土地所有者への管理費補助

…　所有者による手入れがされている耕作地、果樹園等
（スギ・ヒノキ林やミカン園等）

Ⅷ　土地利用の規制

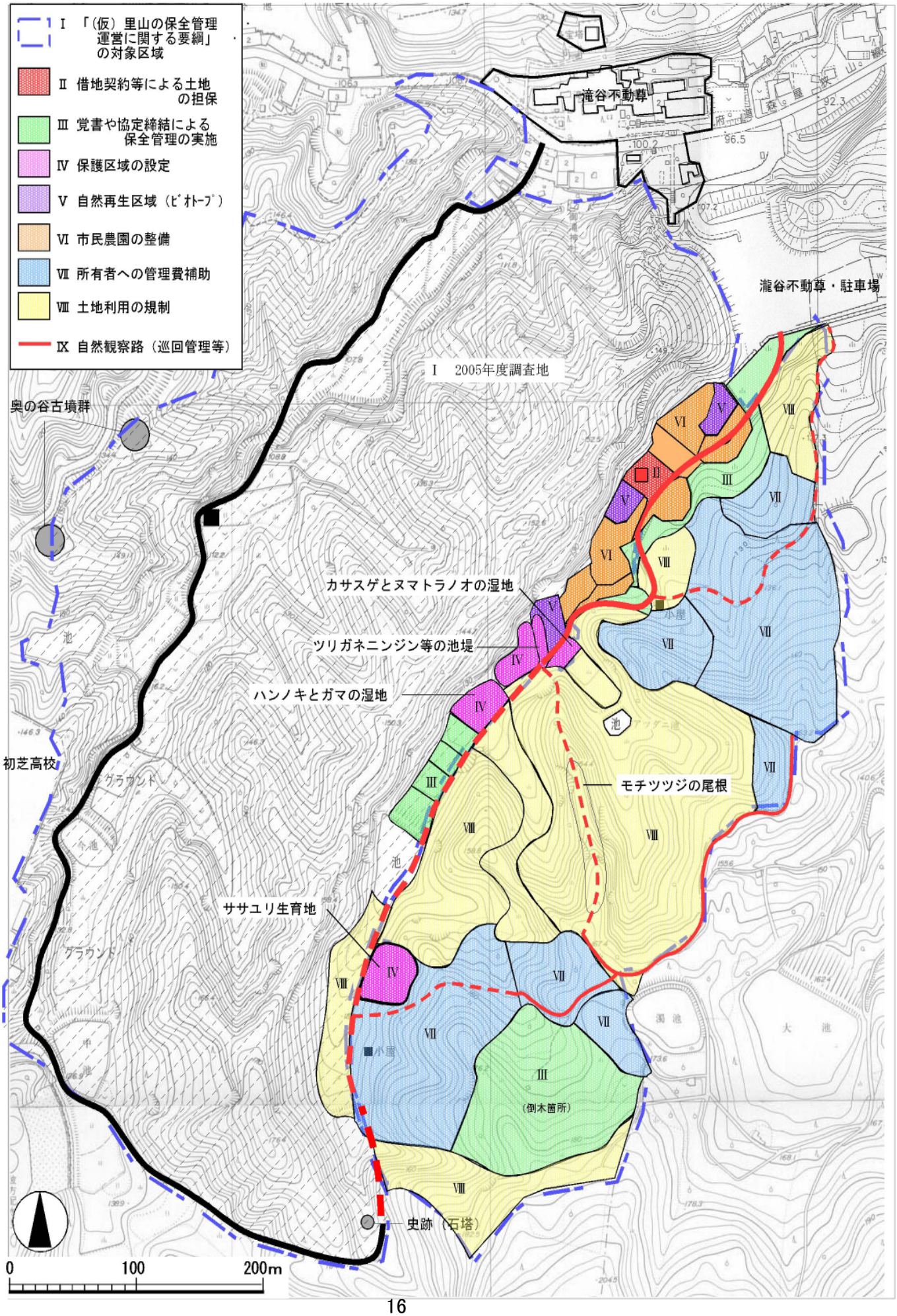
…　上記Ⅰ～Ⅵ以外の対象区域
（将来的には所有者の了解を得てⅡ～Ⅵの保全施策を展開する。）
主にコナラの雑木林を対象とし、常緑樹の伐採等により明るい環境を維持する。

Ⅸ　自然観察路

…　インストラクター等による巡回管理、自然ガイド
奥の谷の自然観察路とネットワークできるよう、歩行困難になっている谷奥や尾根にあがる道などを整備する。

「緑の基本計画」策定に向けた里山保全施策の提案

（「南原」南東部）



３．市内における保全すべき緑地の調査、検討

(1) 保全すべき緑地の現地調査

富田林市内に残存する緑地（奥の谷モデル地区以外）のうち、特に保全を要する緑地として、錦織公園西部地区、お亀石古墳周辺地区、および東板持地区の３ヶ所をピックアップし、現地調査を行った。

●錦織公園西部地区

本地区は、大阪府営錦織公園と金剛伏山台住宅地にはさまれた緑地で、そのうち北側にあたる、旧ゴルフ・テニス練習場周辺の約 6ha は「(仮称)金剛錦織パークシティ」として住宅地開発される予定である。

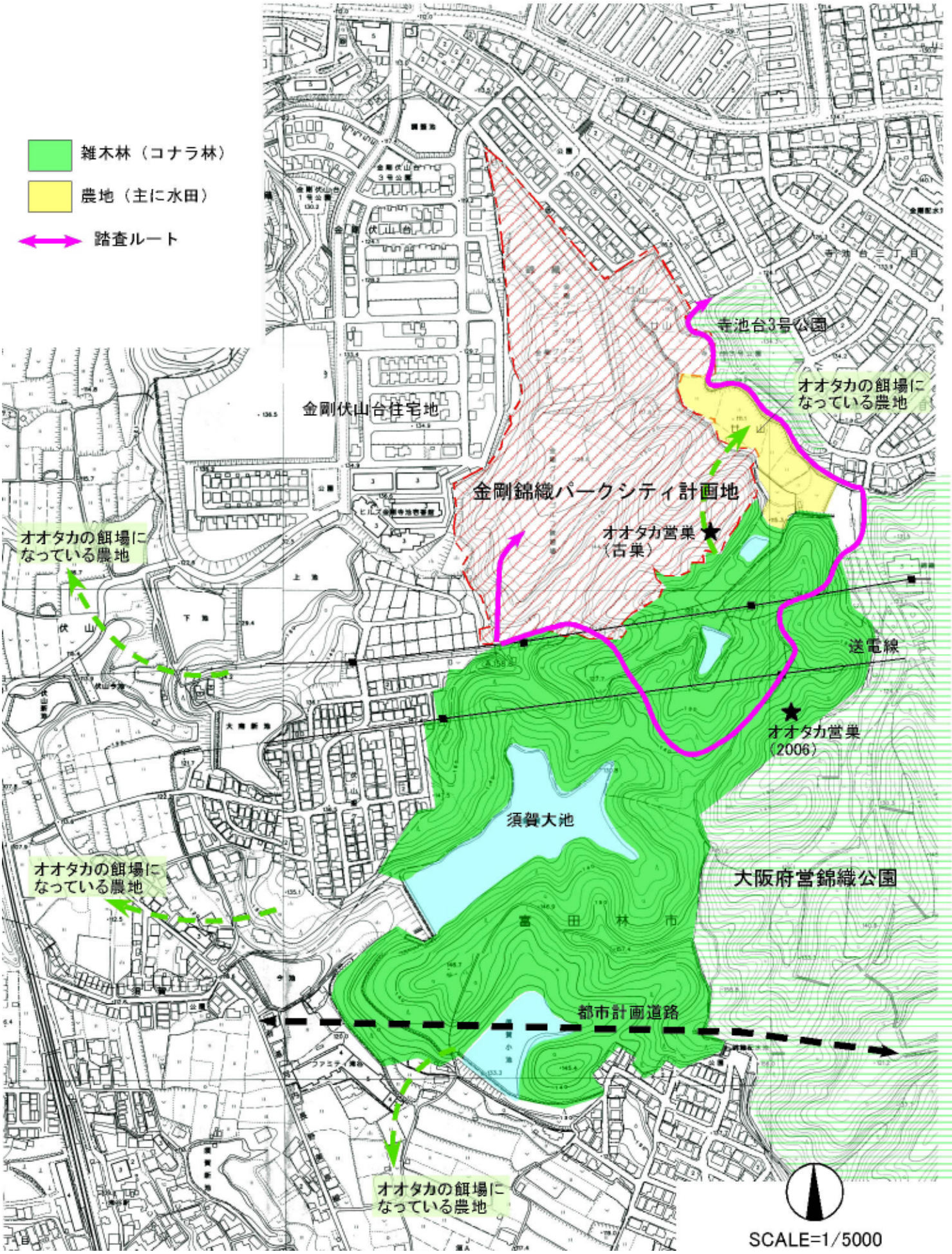
●お亀石古墳周辺地区

本地区は、国史跡指定地のお亀石古墳・オガンジ池瓦窯跡・新堂廃寺跡の東側に連なる緑地で、東側はＰＬ教団の敷地と接し、西側ふもとには江綿グラウンドが立地している。主な植生はコナラ林の雑木林であるが、お亀石古墳と江綿グラウンド、および一部の竹林以外は管理されずに放置されており、広範囲に竹林が広がりつつある。

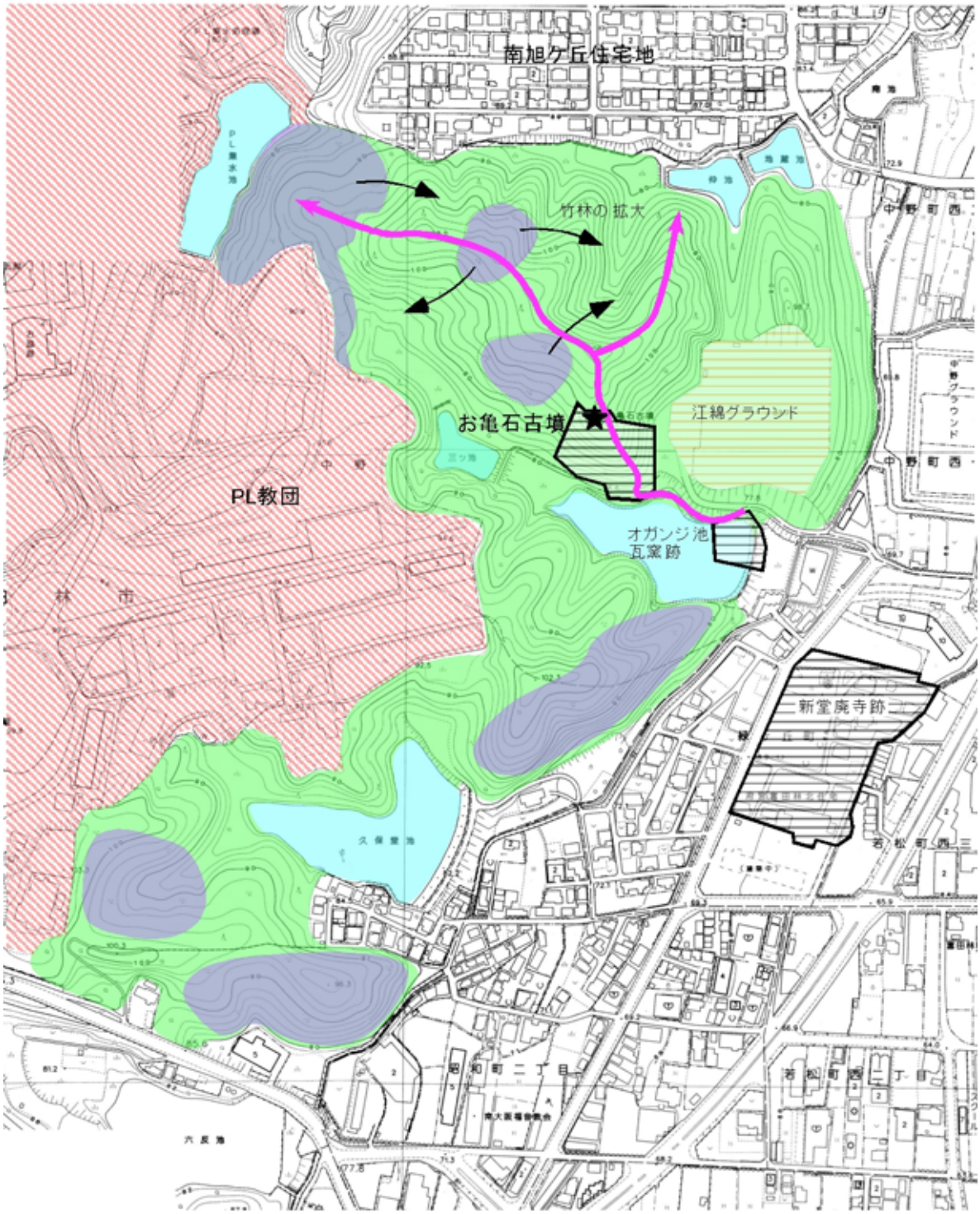
●東板持地区

本地区は、南河内郡河南町との市境近くを流れる宇奈田川沿いの農地と樹林地である。地区の北端の棚田状の水田は、小規模ではあるが畦草草地・ため池・雑木林が一体となった良好な自然環境が残されている。また、そのすぐ南の竹林では、「富田林の自然を守る市民運動協議会」主催の里山講座が、地元の「環境保護委員会」の協力を得て開催されており、宇奈田川沿いに連続する竹林周辺にはホタルが生息している。

錦織公園西部地区　現地調査図

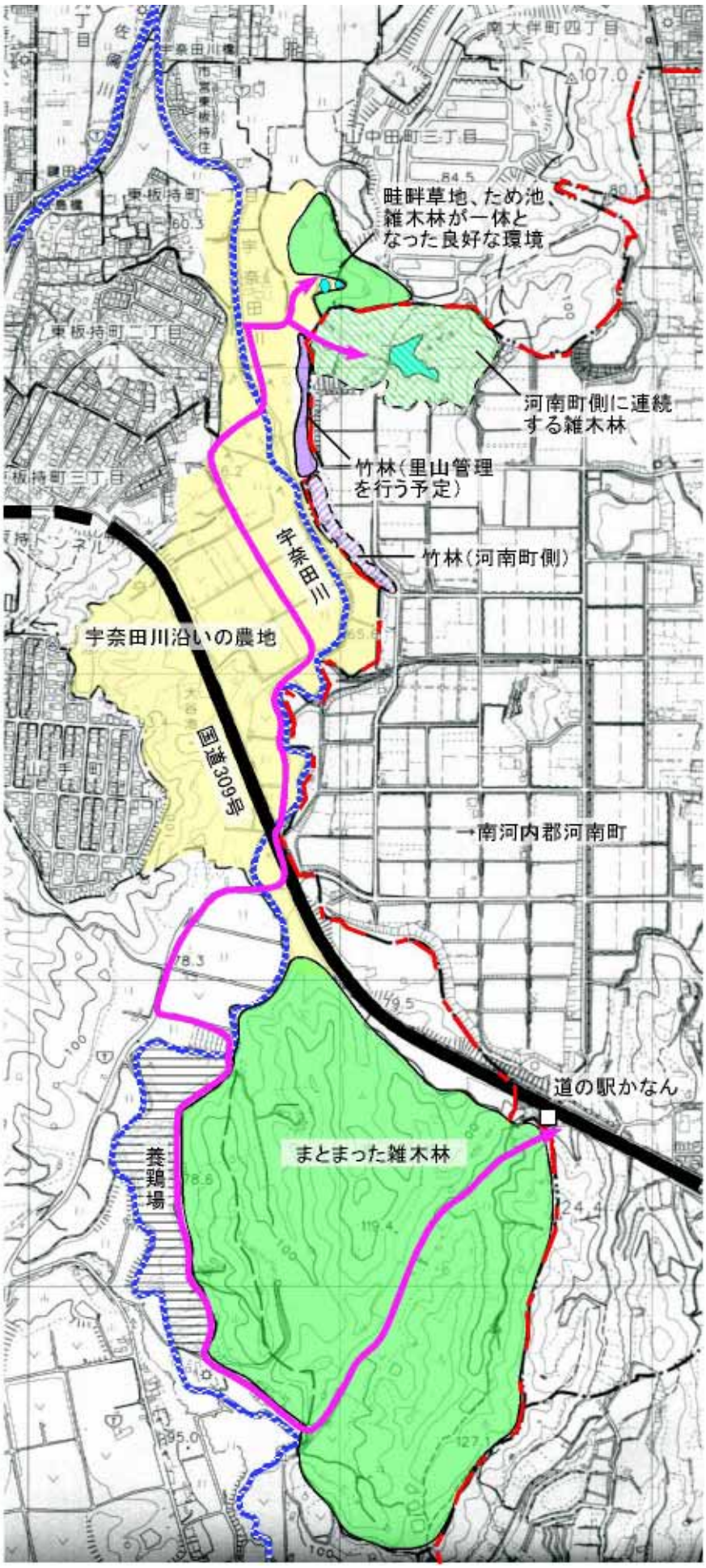


お亀石古墳周辺地区　現地調査図



東板持周辺地区

現地調査図



(2)「緑の基本計画」策定に向けた保全施策の提案

今回、保全すべき緑地としてピックアップした３地区は、いずれも市内に残存するまとまった緑地であるとともに、地域住民がかかわる自然保全の動きが見られる箇所である。また、各緑地は、オオタカが生息する雑木林（錦織公園西部地区）、重要な史跡のある丘陵地（お亀石古墳周辺地区）、小河川沿いの田園地帯（東板持地区）と、それぞれ特色をもっている。そこで、各地区の緑地の保全施策を以下のように提案する。

●錦織公園西部地区

1）地区の特徴

○地元の「寺池台３丁目自治会」によるオオタカ保護の活動が行われている。

○今後は以下のような取組みが予定されている。（「寺池台３丁目自治会便り」より）

・都市計画マスタープランへの要望　　・保護活動の組織づくり
・署名活動のよびかけ　　・大阪府への環境調査の依頼
・住宅開発に対する提案　　など

○隣接する府営錦織公園や周辺の農地とあわせて、鳥類が多く見られる地区である。
（参照：大阪府の鳥類調査リスト 2006 年 10 月）

2）保全施策（案）

施策のイメージ　“ オオタカのすむ森づくり ”

○オオタカ営巣地周辺の雑木林

生息地としての環境を損なわないよう、これ以上の開発や森林伐採、人の立ち入り（密猟、撮影、観察等）を制限すること、また適度な雑木林の管理（竹林の除去、間伐等）が必要である。

→　都市緑地法にもとづく「緑地保全地域」の指定
府営錦織公園の拡張
富田林市「自然環境保全条例」の制定による保全
自然観察会や勉強会などの啓発活動　　など

○住宅開発区域

住宅開発の際には、周辺部の緑地をできるだけ残存させる、住宅内の緑化を積極的に行う、調整池や公園のビオトープ化など、オオタカ生息地と連続した自然環境を創出することが求められる。

→　開発業者への緑化指導
「緑地協定」による緑化の推進
自治会と連携したビオトープづくり　　など

○周辺の農地、ため池

オオタカは営巣地のある雑木林を拠点に、周辺の水田や畑地、ため池周辺等を餌場として飛来していると考えられる。そのため本地区周辺の農地についての保全施策を同時に進める必要がある。

→　土地利用調整エリアにおける農地保全施策
生産緑地地区の指定
住宅地等の開発規制・誘導　　など

●お亀石古墳周辺地区

1）地区の特徴

○地区内のお亀石古墳およびオガンジ池瓦窯跡は、国史跡指定地として富田林市教育委員会が管理している。

○周辺の丘陵地からは古墳や山城等の史跡出土の可能性があり、今後の調査が待たれる。

○地元企業所有のグラウンドや一部の竹林・雑木林は、所有者による草刈り管理等が行われている。

○地域住民による保全運動によって緑地が残された経緯がある。

2）保全施策（案）

施策のイメージ　“緑につつまれた史跡の丘”

○史跡出土の可能性のある尾根筋

特にお亀石古墳から続く尾根筋やオガンジ池南側の尾根などは史跡出土の可能性が高く、現況を保存した上で、今後、詳細な調査と保全を図っていく必要がある。

→　国史跡指定地の区域拡張
富田林市の歴史文化財指定
史跡公園としての都市公園整備
新堂廃寺跡ともネットワークされた史跡散策道の整備　　など

○周辺の竹林・雑木林・グラウンド

竹林の拡大防止と適正管理、エノキやクヌギの大木の保全と良好な雑木林の育成など、史跡と一体となった緑地を形成することが望まれる。また既存のグラウンドは市民利用のできる公的施設としてのポテンシャルが高い。

→　都市緑地法にもとづく「市民緑地」の指定
山林所有者と連携した竹林・雑木林の維持管理
都市公園の整備によるグラウンド利用　　など

●東板持地区

1）地区の特徴

○地元自治会の「環境保護委員会」による自然保全活動（里山管理、川の清掃等）の取組みがある。

○宇奈田川沿いに広がる農地と河畔の竹林、里山などが一体となった良好な環境である。

○宇奈田川の水路はコンクリート護岸となっているが、底部には土の堆積や草が繁茂して生きものの生息空間となっており、周辺ではホタルが見られる。

○南部のまとまった雑木林の一部は、資材置き場や作業場として利用されている。

2）保全施策（案）

施策のイメージ　“自然と調和した田園景観”

○宇奈田川沿い

現在取り組まれている地元自治会の活動をより推進し、ゴミの除去や水質浄化、ホタルが生息する環境の保全など、周辺の田園景観と一体となった美しい水辺景観の形成が望まれる。

→ 地元自治会の環境保全活動の支援
アドプトリバー制度（大阪府）の活用　　など

○北端の棚田と雑木林、川沿いの竹林

棚田畦畔の草刈りや密生した雑木林の手入れ、ため池の補修、間伐による竹林の拡大防止など、現在の状態を維持・改善するための管理を行い、多様な動植物が生息できる自然環境を創出することが望ましい。

→ 都市緑地法にもとづく「市民緑地」の指定
地元自治会と連携した維持管理
里山講座や自然観察などの啓発活動
河南町と連携した環境保全施策　　など

○南側のまとまった雑木林

自然環境についての情報に乏しいため、調査を行った上で保全方針を定め、所有者の理解を得ながら市民参加の維持管理や啓発活動を行いたい。

→ 植生や生きものについての調査
山林所有者と連携した維持管理
里山講座や自然観察などの啓発活動　　など

○宇奈田川沿いの農地

営農を支援して良好な農地管理を行うとともに、遊休農地の活用や資材置き場等の規制・誘導等を行い、現在の田園景観の維持・保全を図ることが求められる。

→ 農業者の支援・育成
遊休農地の「市民農園」としての活用
土地利用の規制・誘導　　など

＜協議会参加団体の活動紹介＞

活動紹介）　特定非営利活動法人　里山倶楽部

里山倶楽部は、「好きなことして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」をコンセプトとして、里山の保全管理や環境教育に関するさまざまな事業を行なっています。会員は約 300 名。毎月１回の定例活動日の他に、次のような活動があります。その中の「とんびくらぶ」では、龍泉寺近くの果樹園で里山初心者が楽しみながら草刈りなどの手入れや果物の収穫などを行なっています。

竜泉の果樹園での草刈り→

連続講座

●里山の学校（里山基礎講座）　●森林ゼミ（人工林管理）　●里林班（雑木林管理）
●窯の穴（炭焼師養成講座）　●弘川千年の森（行政との協働事業）　●里山キッズクラブ（子供対象）

自由参加活動

●とんびくらぶ（山遊び・山仕事体験）　●タントンハン（無農薬米作り）
●桜とりすの森（ﾆｭｰﾀｳﾝでの緑化活動）　●里山バザール（里山関連商品のイベントショップ）

まちづくり・研究活動

●ちゃこマネー委員会（炭本位制の地域通貨）　●里山バイオマス事業部（薪炭林のｴﾈﾙｷﾞｰ化研究）

企画運営･コンサル事業

●里山環境教育オフィス（ワークショップ等の受託事業）　●ど組（森林作業請負、炭・薪販売）

連絡先：寺川裕子，〒584-0024　富田林市若松町 4-20-6，TEL/FAX　0721-25-3128

活動紹介）　石川あすかプランを考える市民連絡会

本市民連絡会は、石川の自然環境を守ることを目的として 1994 年に発足しました。

1999 年からは市民と行政が協働して石川の整備のあり方を考える「石川河川公園自然ゾーンワークショップ」に参加し、さまざまな活動を行なっています。

■活動の内容

1.「あすかプラン」の見直しを府に要望する：　「石川あすかプラン」を見直し、環境保全・自然保護の観点を大きく取り入れるよう､大阪府及び関係市町村に要望する。
2.河川管理のあり方を学習する：　河川管理のあり方や自然環境保全などについて学習する。
3.生物調査に基づき提言する:石川に生息する生物の調査を行い､石川の自然保護について提言する。
4.周辺住民の意見を聞く：　石川周辺住民をはじめ、多くの人々の意見を聞き、くらしを考え、自然を守る立場から､要望や提言に反映させる。
5.市民参加のあり方を研究する：　市民が参加できる河川公園のあり方について研究する。
6.多くの人に賛同を呼びかける：　より多くの人々に、私たちの考えを宣伝し､賛同を呼びかける。

また「石川自然クラブ」では、石川を学び、石川で遊び、石川の自然を守り育てる活動として、生きもの調査やイベント、石川流域フォーラムの開催、石川こども自然隊などを展開しています。

石川河川敷での昆虫調査→

連絡先：笠原英俊，〒584-0086　富田林市津々山台 1-5-1，TEL/FAX　0721-29-7894

活動紹介）　　竜泉・里山クラブ

竜泉・里山クラブ員募集（現在会員数 38 名）

竜泉・里山クラブは「遊び心を持って楽しみながら活動する、自己責任に於いて体力に合った活動をする、」をコンセプトとして、自然環境保全と地球温暖化防止活動、里山の保全と資源の循環型利用、地域との交流をより広く深く進める、地域の子供達に自然との関りかたを知ることにより、自然環境教育に役立てる。

活動場所　富田林市竜泉・大阪狭山市全域・千早赤阪村

活動内容　竹林及び雑木林の間伐と下草刈り、 植樹、竹炭・木炭焼き、竹酢液・木酢液作り、蜜柑農園手伝い、竹工芸、自然材での工作、椎茸栽培、栗栽培、自然環境保全に関する講座及び体験学習、

主な設備　竹窯２基、土窯１基、蒸留設備１基、風力発電設備、（出力1.5ｋw予定）１基、雨水浄化設備、粉炭機１基、ソーラ発電設備、多目的高温窯（工事中）１基、蜜柑園のお手伝い。

最近の活動　宝塚地域の子供達による体験学習 35 名（竹切、炭焼、豚汁、竹飯盒、蜜柑刈り）東條小学校２年・４年生 40 名によるクヌギ苗 200 本植樹。大阪シニア自然カレッジ受講生 28 名体験・講座学習。

活動日　毎週水曜日、第２・第４土曜日活動時間　原則として 9：30 ～ 15：00

連絡先　箭島健雄 090 － 2595 － 2919　藤田貞夫 090 － 6739 － 0225

事務局　〒 589 － 0022　大阪狭山市西山台３丁目３－ 14

活動紹介）　　富田林の自然を守る会

協議会主催で行われた里山保全作業（富田林「里山ホリデー」）、自然観察会、昆虫ウオッチング、野草を食べる会、里山クラフトなどを主体的に取り組みなした。また、協議会によって、奥の谷小屋に薪ストーブが設置されました。

協議会の主催活動以外の取り組みとしては、国際ワークキャンプ（ＮＩＣＥと共済；協議会は協力参加）の開催、ＮＩＣＥ週末キャンプ、大阪自然環境保全協会が主催する自然環境市民大学などの受け入れ、水利組合に協力しての溜池の土手の草刈り、保育園の遠足の受け入れなどを行いました。10 月の NICE 週末ワークキャンプでは、奥の谷のみかん小屋に２泊３日で、これまで８年間の国際ワークキャンプ参加者の同窓会を行い、22 名の参加者がありました。

国際ワークキャンプでの下樵り作業

大阪自然環境保全協会が錦織公園<指定管理者：みどり会>から委託された里山管理に協力し、モウソウチクの伐採を中心とした「里山づくり体験講座」にスタッフを派遣しました。

連絡先：田渕武夫

〒 584-0024　富田林市若松町 4-16-21

TEL/FAX　0721-24-7960

活動紹介）　　富田林勤労者山岳会「嶽の会」

2006年度 の活動報告

＊富田林の自然を守る市民運動協議会に参加する団体としての活動

９月１０日(日)午前１０時から６名の参加で、 自然観察路の草刈を行った。 全員汗だくで、背丈を越える笹を刈り、 観察路を開通させたが、 作業に夢中で記録写真は撮れず。 （残念）

当日はＮＩＣＥの週末キャンプと重なったため、 一緒に昼食をとり、 楽しく交流した。

＊その他の活動

年末年始に 「嶽の会」 結成３０年の記念山行として、 ネパールトレッキング （Pike Peak 4070m） を実施した。

トレッキング途中の山岳地帯の2000m～3000mの村々の唯一のエネルギー源が薪であり、村周辺の木はほとんど切り倒されていた。 そのため、 子どもたちが遠くまで薪集めを手伝っていたが、 萌芽更新、 炭焼きなど里山で行われてきた知恵を広めたいと思った。

（籠一杯の焚き木を運ぶネパールの子どもたち）

連絡先 ： 自然保護担当　上角　敦彦 （TEL 0721-24-8757）

活動紹介）　　ＮＩＣＥ　富田林チーム

（特活）ＮＩＣＥ 日本国際ワークキャンプとは、日本・東アジアで国際ワークキャンプを主催する、若者主体のNGOであり、90年に設立、会員は約1,200名、女性／学生が各7割以上となっている。2005年は9ヶ国で52回主催、また58ヶ国のワークキャンプに639人の日本人を派遣し、148回の週末ワークキャンプを企画し、2,279人（＋住民数千人）が参加。ＣＣＩＶＳの代表やNVDA（アジア・ボランティア発展ネットワーク）の代表も務め、若い力と地域の力で様々な生態系・文化・個性が生き生きと友好共存する地球社会を開拓しています。

富田林の自然を守る会とは、1999年の国際ワークキャンプから、以下を共通の目的としに活動している。

1）貴重で豊かな里山の保全活動を応援する

2）住民が自分達の地域の里山を見なおし、課題を改善する意識と行動を高める

2006年、週末ワークキャンプ･国際ワークキャンプ活動実績

開催日	参加者数	主な活動内容・成果
06年1月21日～1月22日	リピーター8名＋初参加者5名	「どんど焼き」・竹ワーク
06年4月29日～4月30日	リピーター7名＋初参加者0名	「野草を食べる会」・遊歩道作り
06年5月20日～5月21日	リピーター9名＋初参加者5名	遊歩道、階段作り・池周辺の草刈り
06年6月10日～6月11日	リピーター8名＋初参加者4名	遊歩道、階段作り・梅狩り
06年7月19日～8月12日	参加者25名（日本、韓国、ﾌﾗﾝｽ、ｲﾀﾘｱ、中国、ｽﾛﾊﾞｷｱ）	スギ・ヒノキの間伐、雑木林の下草刈り、間伐、遊歩道作り等
06年9月10日～9月11日	リピーター7名＋初参加者7名	里山コンサート・遊歩道作り
06年10月7日～10月9日	リピーター19名＋初参加者2名	大同窓会、NICEな森の総点検など
2006年11月18日	リピーター4名＋初参加者0名	講演会へ参加、竹伐採作業
06年12月2日～12月3日	リピーター6名＋初参加者0名	錦織公園の整備（間伐）、遊歩道作り、竹の間伐

3）富田林市の地元の方と日本・世界の若者達が 交流、相互理解する

2007年1月のミーティングでの総括、反省、アンケートを有効に活用し、さらに多くの人々を巻き込み、また、ワークキャンプの質を高めていくことができるように、富田林の自然を守る会の皆さんと共に年間計画・目標に沿う活動を繰り広げていきたいと考える。NICEのメンバーは素人のボランティアであり、特別な技術、知識は持ち合わせていないが、だからこそ、協力を大切にし、地元の人々と目的を同じくして里山保全活動を展開していきたい。　　連絡先：NICE関西オフィス　TEL　06-6576-0089

平成１８年度事業報告

１．役員会・総会＝市役所会議室）

①4月１９日（水）、②5月２４日（水）、③6月２１日（水）、④7月２０日（木、⑤8月１７日（木）、⑥9月１３日（水）、⑦１０月１８日（水）、⑧１１月１５日（水）、⑨１２月１２日（水）、⑩1月１７日（水）、⑪2月１５日（木、⑫3月１４日（水）、総会3月２８日（水）

２．自然環境保全の活動

◆里山管理作業　「富田林里山ホリデー」

午前１０時～午後３時　奥の谷	参加人数
①　　5月２１日（日）	１１人
②　　6月２５日（日）	７人
③　　9月１７日（日）	３人
④　１０月　８日（日）	６人
⑤　１１月１９日（日）	８人
⑥　１２月　３日（日）	３人
⑦　　1月２８日（日）	４人
⑧　　2月　４日（日）	１０人
⑨　　3月２５日（日）	人

◆自然観察路の整備

９月１０日（日）午前１０時～午後３時　奥の谷　参加人数６人

◆生きもの水辺づくり

６月５日（日）午前１０時～午後３時　奥の谷　参加人数１７人

３．自然環境の観察会について

場所　奥の谷、時間　９時～１時	参加人数
①　４月　９日（日）自然観察会	１５人
②　５月　７日（日）自然観察会	雨天中止
③　６月１０日（土）自然観察会	１５人
④　７月１５日（土）昆虫ウォッチング	４１人
⑤　９月　９日（土）自然観察会	６人
⑥１０月　７日（土）自然観察会	１４人

４．自然環境の講座について

①　春の野草を食べる会

４月２９日（祝）午前１０時～３時　奥の谷　参加人数６９人

②　自然クラフト（つる細工）

１１月２３日（祝）午前１０時～３時　奥の谷　参加人数１３人

③　東板持地区で講座開催

講　座　１１月１８日（土）午前 10 時～12 時　農業倉庫２階和室
参加人数１２人、講師　伊藤孝美さん
作　業　１２月９日（土）午前 10 時～午後３時（竹きり）・・雨天中止

５．国際ワークキャンプへの参加

８月４日～８月１２日富田林市　８月５日（土）歓迎会
●参加人数スタッフ延べ５５人、日本人青年２人、留学生２人、外国人６人
（韓国２人、中国１人、スロバキア１人、フランス１人、イタリア１人）
●作業内容、間伐と階段づくり

６．交流会

忘年会　　１２月１６日（土）　午前１０時～午後３時　奥の谷
参加人数７人、午前中作業・午後ぼたん鍋で忘年会
新年会（どんと・もちつき）　１月１３日（土）　午前１０時～午後３時　奥の谷
参加人数４０人、どんと焼き、書初め、餅つき

７．冊子「富田林の自然」発行

①巻頭言（寺川）
②協議会イベント写真（田淵）
③佐藤治雄（大阪自然環境保全協会副会長）の論文
④２００６年度自然環境保全活用調査報告より抜粋
⑤特集の報告（東板持の里山保全活動）
⑥団体報告（各団体代表者）
⑦２００６年度協議会事業報告（事務局）

８．自然環境活用調査　その４

～市民が守り育てる自然豊かな里山をめざして～
奥の谷・南原モデル地区における将来プランの具体化
「富田林市緑の基本計画」策定について
●緑地調査　錦織地区　　８月２４日（木）午前９時　　市役所第２駐車場集合
南原地区　　９月３０日（土）午前１０時　瀧谷不動尊駐車場集合
東板持地区　１１月 15 日（水）午後１時　　市役所第２駐車場集合
●緑の基本計画ヒアリング　　１１月２７日（月）午後４時～　市役所会議室
●お亀石古墳周辺地区ヒアリング１２月　５日（火）午後２時～　市役所会議室
●錦織「オオタカ」情報交換会　１２月１１日（月）午後７時～　市役所会議室
●錦織「オオタカ」情報交換会　　１月１８日（木）午後６時～　市役所会議室
●錦織「オオタカ」現地調査会　　２月１５日（木）午後１時～　市役所会議室

富田林の自然を守る市民運動協議会

富田林の自然を守る会	田渕武夫
竜泉里山クラブ	松原安茂
ＮＰＯ法人里山倶楽部	寺川裕子
石川あすかプランを考える市民連絡会	笠原英俊
富田林勤労者山岳会「嶽の会」	上角敦彦

オブザーバー
日本国際ワークキャンプセンター関西事務局　吉井久乃

事務局
富田林市まちづくり政策部農と水みどり課みどり係
植田信二 , 山内義章 , 安達清昭 , 平田　明, 中尾友保
〒 584-8511　富田林市常盤町 1 番 1 号
TEL　0721-25-1000（内 431）　FAX　0721-20-2072
e-mail　mizu-midori@city.tondabayashi.osaka.jp

富田林の自然

2006 年 3 月 29 日　発行
編　集　富田林の自然を守る市民運動協議会
発行所　富田林市まちづくり政策部農と水みどり課みどり係